

基督の愛は双方向

雅歌 6 : 2、3

導入 ; 雅歌は何を描いているのでしょうか？

雅歌は一体何を描いているのでしょうか？

ソングオブソロモンと呼ばれるところからも、ソロモンの名が6回登場してくるところからも、著者は、ソロモンとされています。しかしながら、キリストが、「もしわたしが、自分のことを証しているなら、その証言は真実ではありません。」とされているように、ソロモンが、自分の恋愛関係を物語っていることが正典として位置づけられることは考えにくいと言わざるを得ません。

ソロモンが、彼にとって歌の中の歌と言っていることから、彼にとってその中身は、最も大事な信仰告白であるに違いありません。わたしはねたむ神である、と言われ、わたしのほかに神はいない、とされている旧約聖書においてそれは、神とイスラエルのかかわりを歌っているという理解は、必然かとも思われます。旧約聖書は、わたしについて証しているというキリストの見解からは、キリストと教会に集約されると考えることが最も妥当ではないかとも考えられます。

雅歌は一体何を描いているのでしょうか？

それは、まずは、雅歌が描く愛が、双方向であるということですね。

雅歌で主役とされている方が、わたしを愛してくださる！という宣言から雅歌は始まっています。「彼はわたしに口づけをしてくださるでしょう（1 : 2）。」「油にはあなたの名が注がれ、それゆえにおとめたちはあなたを愛したのです（1 : 3）。」と雅歌が描く愛は、双方通行であることが伺えます。その当事者間は特定し得るのでしょうか？その手がかりはどこに見い出せるのでしょうか？

本論 ; 花婿はだれか？花嫁はだれか？

花婿はだれなのでしょう？花嫁はだれなのでしょう？

ソロモンにとっての歌の中の歌。ヘブル語の ל という前置詞が、方向や関係を表わすことから、ソロモンにとっての最高の歌は、わたしたち信仰者にとってもそこにかげがえのないかかわりを見出すことになることを意味していると思われます。おとめの願いで始まり、おとめの願いで終わるこの雅歌は、おとめを愛した方とおとめが愛した人の間の愛のかかわりを歌ったものですね。おとめ、ないしは、花嫁がわたしたちで、花婿がキリストだとすると、すでにそれは、わたしたちとキリストとの、キリストとわたしたちの間の愛

のかかわりを雅歌が歌っているということになります。1章2節で、愛と訳されたドードは、旧約聖書に61回出てきますが、うち40回が雅歌です。あなたの愛は、葡萄酒よりもうれしくなるから、と歌いながら、彼がわたしに口づけをしてくれます。そうお願いしておいたから。という指示形でこの祈りを理解しようとする、そこに、キリストとわたしたちのかかわりに、父なる神の姿が見えてきます。それは、さながら失われた息子が、父と天の父に祈るがごとくです。しかも、この方は、羊飼いでられることから、イエスさまの39の名のひとつであることから、キリストと教会のかかわりが浮上してまいります（1章から）。

一途な彼女は愛している人のことで頭がいっぱいで、ようやく彼を見つけ、自分の家に連れてくるのですが、ふたりが結ばれるのは、まだ先のことで、もうしばらく待たなければならないことが繰り返し述べられています。ふたりが結ばれたかと思ったら、一転舞台は荒れ野となってしまいます。町を見張り巡回している人たちを通り過ぎてほどなくして、ついに彼女は、彼女の魂の愛する方と出会うんですね。この方をつかまえて決して油断せず、わたしの母の家に、わたしを身ごもった人の客間にお連れしました。とあるのですけれども、花嫁が花婿と結ばれるためにとったすべてが、人が神を探究し続け、出会い、この方を離さず、どこどこへお連れするという方向性が、福音のベクトルと真逆であることに気づかされます。そこには救いは無く、したがって、次の瞬間、舞台は荒れ野に身を置くことになるんですね（3章から）。

庭園、それは花壇にたとえられた教会、神の国を表わしていて、牧者でもあるこの方は、ゆりの花を育ておられ、それは羊たちをも意味していて、互いが属するという表現でキリストと教会を表わしているものと思われます。羊飼いは威風堂々としていると目され、羊たちはまぶしすぎる存在として描かれ、互いを慕う思いが幾重にも映し出されています（6章から）。

わたしの愛する方は、牧者の働きをされるために、ご自身の庭園へ降りて来られました。わたしは、わたしの愛する方に、わたしの愛する方は、わたしに結ばれ、牧者の働きをされているのです。と言い表している今朝の聖書は、さながら詩編23篇の主はわたしの羊飼い、わたしには何も欠けることはありません。と言っている心境そのものですね。雅歌では、花婿が花嫁の美しさを幾重にも賞賛し、自らの願いを言い表わすと、花嫁も花婿に向かって、単刀直入に愛を告白し返す展開となっています（7章から）。

花嫁がひたすら愛する方と結ばれることを願って、時が来るのを待ち焦がれている、一方で、花婿も花嫁の存在そのものを喜び、花嫁の愛の告白（3、6、14節）を喜んでいることが伝わってきます（8章から）。

結び；雅歌に触れる意義はどこにあるのでしょうか？

雅歌に触れる意義はどこにあるのでしょうか？

ひとえに、花嫁の花婿への一途な思いが、旧約聖書で特にねたむ神と紹介されて、わたしのほかに神がないはずだ！という旧約聖書を貫いている観点から、雅歌の意義をそれはほうふつとさせるもので、わたしたちの、主への思いがいかなるものかが問われているように受け止められるのです（4章から）。心を尽くしてあなたの神である主を愛するの、「心」は感情の座です。わたしのほかに神はいないはずだ。と言われるお方をどれほど一途に思っているのでしょうか？

黙示録の「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしの手を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう（3：14）。」と、主が戸を叩いている光景を彷彿とさせる光景が5章に描かれています。そこにはまた、王が王子のために婚宴を催す天国の光景や花婿が迎えに来るのを花嫁が待っている際、油を用意していたか否かが問われる話を思い起こさせるような展開にも感じられるような次第です（5章から）。

花婿の最後のことは、あなたの声を聴かせておくれ。で。たったひとりの愛する者（6：8）に向かって呼びかけていますね。花婿にとってそれは、心をときめかす（4：9）ものだ。というのですから。そのようにわたしたちの祈りを聴いてくださるのだとしたら、あなたの声を聴かせておくれ。わたしにとってそれは、心をときめかすものだ。と言ってくださるお方に、わたしたちは、どんな声をお聴かせしましょうか？